

平成30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第3号

平成30(2018)年10月4日
栃木県農業環境指導センター

オウトウショウジョウバエ類のいちごでの発生について

1 害虫名

A 和名：オウトウショウジョウバエ 学名：*Drosophila suzukii*

B 和名：ニセオウトウショウジョウバエ 学名：*Drosophila pulchrella*

*上記の2種は近縁種である。相違のある部分については個別の説明を加える(A、B)。

2 発生作物名：いちご

3 発生経過

(1) 平成30(2018)年8月に、塩谷町の施設栽培の夏いちごにおいて、収穫後の果実に穴が開いて腐敗する症状が確認された(写真1、2)。このため、ほ場から熟度の異なる果実を採取し、熟度別に別容器に保管したところ、熟した果実からウジ状の幼虫が発生・加害し腐敗した。この幼虫を飼育し羽化させ形態観察したところ、オウトウショウジョウバエ及びニセオウトウショウジョウバエの混発であることが判明した。

(2) 分布及び発生状況

A:日本を含む東アジア原産だが、欧州や北米にも侵入している。国内では本県のブドウ、千葉県のブルーベリー、徳島県のヤマモモ、福島県のオウトウ、ブルーベリー及びブドウにおいて被害報告例がある。

B:本州、四国、九州、北海道、中国東部に分布する。オウトウショウジョウバエと同所的に生息する。

4 被害の特徴

雌成虫が熟したいちご果実に産卵し、孵化した幼虫は果実内部に食入する。食害された果実は腐敗し、果汁がしみ出てショウジョウバエ類の発生源となる。

5 形態

(1) A、B 両種の形態は似る。成虫は体長 3mm 弱、暗黄褐色、雄は後方に向かって多少とも暗色となり、翅頂近くに小黑紋を有する。なお、小黑斑は羽化直後では不明瞭である。雌の尾端にある産卵器の下縁には、鋸歯状突起が並ぶ(写真3、4)。

(2) 蛹の体長は4mm内外で外被は赤褐色。前端の1対の突起は、先端が多数の刺状に分かれる(写真5)。

(3) 幼虫は体長約6mmに達し、白色のウジ状。卵は乳白色、長径0.5mm内外の1対の糸状突起を有する。

(4) 両種の識別は、雄では翅の先端前縁の黒い斑紋と性楯の形で行う。雌では導卵突起の形で判断する。幼虫、蛹の形態での識別は困難である。

6 生態及び生活史

A:寄主植物はオウトウ、キイチゴ、クワ、ブルーベリーなど約20種が知られる。関東地方北部での発生回数は年間10回程度であり、成虫は落葉下などで越冬する。卵から成虫までの発育日数は15℃で約30日、22℃で約14日、25℃で約10日である。発育に必要な最低気温(発育零点)は約9℃である。

B:寄主植物はブルーベリー、ラズベリー、ブラックベリー等が知られる。オウトウショウジョウバエと比べ低温性で年間の発生回数が少なく、発生時期が遅い。生態、生活史については不明な部分が多い。

7 防除対策

(1) 本種は様々な果実の熟果に寄生するため、適期収穫を行い、被害を軽減する。

(2) 本種による被害果は見つけ次第取り除き、土中に埋める等処分する。

(3) 平成30(2018)年10月4日現在、いちごのショウジョウバエ類に登録のある農薬はない。



写真1 ほ場の様子



写真2 幼虫が果実を食害する様子



写真3 オウトウショウジョウバエ雄成虫



写真4 ニセオウトウショウジョウバエ雄成虫



写真5 蛹

8 引用文献

栃木県(2009)平成21年度病害虫発生予察特殊報第3号

瀬戸昌宣ら(2015):植物防疫 第69巻第2号 77~82.

佐々木正剛ら(1996):東北農業研究 49, 161-162.

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センター ホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。